

# AZ stocks Plus.2

【無料】

電子版同人マガジン



薔薇の館

それは意志を持つ館

きまぐれに、いたずらに

それは今日も時々刻々と変化する

お蔭様で今日も館は大賑わい？！

女性向けオリジナル作品 (BL作品)

# AZstocks Plus.2

|アズストックス プラス|

9 Sep. 2015

不定期発行【無料】

表紙：ZEM

文：Neiko



## Contents

- 目次
- 扉絵
- [1] バレンタインデーの甘い罠
- [2] 魔界のひな祭り
- [3] 悪魔だけどハッピーハロウィン
- [4] 悪魔だけどメリークリスマス
- [5] 悪魔だけど死ぬ気でリベンジ!
- 編集後記
- 奥付

### 【電子版同人マガジンについて】

こちらは天使・悪魔・墮天使などをテーマとした異世界ファンタジー漫画や小説、イラストを掲載した電子版雑誌です。

### 【発行元について】

女性向けオリジナル同人サークル

「となりくみ事務局」が作成しています。

\*URL\* <http://www3.to/tonarikumi>

<http://june.lix.jp/azstocks/>

\*E-mail\* [tonarikumi@gmail.com](mailto:tonarikumi@gmail.com)

ご質問やお問い合わせは上記までお願いします。ご感想などいただくと、創作活動の励みになります。

## \* 短編集 第二号発刊 \* \* \*

AZ stocks Plus.1 は「薔薇の館」が舞台ですが訪問者の話でした。今回は「薔薇の館」が舞台ですが「アスベエルとフェンリエル」が主人公です。

意志を持つ館のきまぐれ、いたずらに翻弄される話を集録しました。2015年3月のJ. GARDEN38 で配布したショートショート【魔界のひな祭り】も収めました。メフィストフェレスとペット達のほのぼの・甘々・時々Hな話をお楽しみください。

それでは、どうぞ、AZ stocks Plus.2 をご覧ください。  
【サークルメンバー同】





# 薔薇の館



ここは薔薇の館  
天界、魔界、いずれにも属さない狭間の界に建つ  
悪魔メフィストフェレスが支配する館

甘く危険な香りに包まれた庭には  
真紅の薔薇が咲き誇り  
訪問者を魅了する

歪み続ける世の狭間で  
幻想の空間に酔い  
まやかしの時間に身を委ねる

怠惰で漫然とした時間に溺れる愚者が払う代償とは・・・

## [1] バレンタインデーの甘い罠

---

今日は気をつけた方がいいよ

確か、朝逢った時、メフィストが言った。

あの時は意味が解らなかったけど、思い返してみれば笑いを噛み殺している表情だった気がする。

かなり、腹が立ってきた……。

今、その意味が解ったから……………。



もう、どうしろというのだろう。

動けば動く程、足元が悪くなる。身体のバランスが取れないし、足を踏み出せないし、手を伸ばして掴まる物も無い。

手を伸ばして捕まえたのがフェンリエルの腕だから、困ったとか困らないとか、そういう問題じゃあない。

「ア、アアアスッ！ どうなってるの？ この部屋っ！」

「知るかっ！」

フェンリエルと一緒にのんびりくつろいでいた部屋が突然、泥沼と化した。

館の嫌がらせか、あっという間に变化したから何の対策も取れないまま、二人して泥沼にはまり込んでしまった。

「あ、足が……うわっ！」

「うわあっ！ 引っ張るなよっ！ 俺まで転ぶじゃない……つかああっ！」

フェンリエルに引っ張られたお陰で俺も一緒になって泥沼と化した床に頭から突っ込みそうになった。

何とか両手を突き出して、顔面からダイブするのは避けたが、両手両足の自由が利かなくなったんじゃあ意味が無い。フェンリエルは両手を後ろに着いて泥沼の中に座り込んでいる。顔や服に泥が跳ねて汚れていた。

「あ……」

「何だよ？ 大丈夫か？」

「アス、これ、チョコだよ」

「はあ？」

「だから、この泥、チョコだよ。凄く甘いチョコ。今舐めたんだけど、甘くて美味しいよ」

「なっ！ 部屋の中にチョコレートの沼あ？ ふざけんなっ！」

「でも美味しいよ、ほら、アスも」

ズボッ、という音が聞こえた。

フェンがチョコでできているなんていう、ふざけた沼から手を抜いて俺の口に指を突っ込みやがった。お陰で舐める羽目になったが、確かに悪くない味だ。

よく見れば、床は勿論、壁も天井も全部チョコレートらしい。ご丁寧に、チョコとホワイトチョコの両方が入り乱れている。

「ね？ 美味しいでしょ？ 凄いね！ この部屋、全部チョコだよ」

無邪気に喜ぶところがフェンらしいといえららしい。

が、調子に乗って舐めたのが悪かった。

ただのチョコなら良かったがタチの悪い館の事だ。当然のようにただのチョコで無かった。

「おい、フェン！ 舐めるの止める！ これ……」

「ア、ス……。ねえ……」

時すでに遅し。フェンリエルの頬がほんのり紅色に染まっていた。ご丁寧に即効性の媚薬入りだった。

チョコの部屋、っていうだけで非常識なのに、そのチョコに媚薬を混ぜるなんて悪魔の館らしいといえばらしい。

しかし感心してもいられない。

すっかり薬にやられたフェンリエルがチョコレートの泥の中を泳ぐようにして近付いて来た。

「ねえ、アス……」

噎せ返る甘ったるい香りの中、理性なんて物は簡単に吹っ飛んだ。

雨の雫よりも遅い速度で壁を伝い落ちるクリーム色の雫に濡れながら俺はフェンリエルの細い体を腕に抱いた。

肌を重ねるとヌルヌルとチョコレートで滑る。

その感触が堪らなく気持ち良かった。

「ヤン……、ヤアツ……ア、ス……」

「……フェン……、すっげえ、美味しい……。お前のココ、甘くて美味しい」

「アス、も……美味しい……ッ！ アッ！ そ、そこっ！」

一度始めると行為は止められない。

多分、この部屋の様子を館の主メフィストフェレスは覗き見しているに違いない。

そう思うと腹立たしい事この上ないが、忠告は受けていた。館の罠にはまった方が悪い、と言われればそれまでだ。

「で……も、んな事……どうでもイイ」

俺は館が招いたらしい淫魔達も交え、快楽に溺れた……。

「やれやれ……気を付けなさい、と言ったのにねえ。悪魔の罠はとても甘いから……」

長椅子に身を委ねたメフィストは、淫らな宴が映し出された壁を見詰めながら微笑んだ。

ゆったりと肢を組み、柔らかなクッションに肘を突きながら淫魔に挟まれて喘ぐ可愛い同居人達を見詰めている。

「助けてあげてもいいけれど……中途半端な処で助けると逆に可哀相かもしれないね。あと少し……いや、じっくり観賞させて貰おうかな」

クツクツ、と喉を鳴らして笑うメフィストの傍に、メイド姿のインプが二匹寄って来た。手にはハート型のチョコレートを持っている。勿論、メフィストに渡す為に作ったものだ。

それを受け取りながらメフィストはニッコリと微笑む。

「思い出に残るバレンタインデーだねえ」

ここはメフィストフェレスが支配する悪魔の館――。

館の罠はいつ始まるともしれず、そしていつ終わるとも知れなかった。

## [2] 魔界のひな祭り

---

メフィストがテラスで紅茶を楽しんでいると何やら楽しそうな声が聞こえて来た。

「離せよ！ おい！」

「アス様！ 裾を踏んでいますわ！」

「フェン様！ 刀が逆ですわ！」

「あ、の！ 僕は、ちょっと！」

聞こえてきた声の主は館で飼っているペットの墮天使アスベエルと天使のフェンリエル、そしてメイド兼使い魔のキュリーとアリーだ。館へ来たばかりの時は心を閉ざしていたアスとフェンも今はすっかり馴染んでいて毎日楽しい騒動を起こしてくれている。

「どうしたんだい？」

のんびりとした声を掛けると尖った声が矢継早に返って来た。

「メフィスト！ コイツラ、頭がおかしいぞ！」

「それは失礼ですわ！ アス様のご主人様を驚かせたいと仰ったので私達は！」

「ば、僕も、この格好はあまり……」

百聞は一見にしかず、とはよく言ったものだ。聞き取り辛い四人の言い分を聞かずとも、彼等の様子を見れば何が起こったのか直ぐに解った。

「面白い恰好だね。人間界の小さな国で春先に行われる、ひな祭りの真似事かい？」

「そうですわ！」

「お内裏様とお雛様ですわ！」

メフィストの質問にメイド二人が即答した。目を輝かせた彼女達は両手を握り合いながら何度も頷いた。今日の騒動の仕掛け人は二人のメイドらしい。

「女の子の健やかな成長を願って飾られる雛人形になったアスとフェン、悪くないね」

「なんで俺がこんなヒラヒラの動き辛いモン着なきゃいけないんだよ！」

「アス、それは十二単と言う着物だよ。似合っているね。フェンは刀を差し直しなさい」

面白がるメフィストは二人のメイドが楽しそうに着付けをする様子を見ながら唇の端を吊り上げて笑みを作った。

「そろそろ魔界も賑わい始める頃かな？ 元々、女の子が受ける災厄を代わりに受けるという身代わり人形なんだよ、雛人形は。役目を終えた雛人形は徳の高い人間達の手で供養されるんだけどねえ……」

メフィストが言葉を切ると、アスとフェンが文句を言う口を閉じ、一斉に振り返った。面白がって着付けをしていたメイドの顔も、悪魔特有の闇色の表情となる。

「供養が不十分だったり、受けた災厄に対する悲しみが強過ぎると、人形の魂が憎しみの炎に包まれて魔界に堕ちて来るんだよ。その炎は魔界のそこかしこで見られるんだ。炎の中で永遠に続く苦悶の舞を舞いながら、受けた災厄の悲惨さを謳い続ける姿を想像してごらん。まさに悲劇だ。二人も真似してみるかい？ 悲しくも美しい魔界のひな祭りを」

喉で笑いながらメフィストが言うと、ペットの二人はゴクリと喉を鳴らして首を左右に何度

も振った。

「冗談だよ、怖かったかい？」

「メ、メフィスト！」

「ちょっとからかってみただけだよ。さあ、お茶にしよう。珍しいお菓子があるんだ」

「べ、別に怖がってなんかないからな！ からかうな！」

「ゴメン、ゴメン。ひな祭りに出されるお菓子は何種類かあるんだ。最初に選ばせてあげるから機嫌を直して」

ね、とメフィストが微笑み掛けるとアスは頬を膨らませた。

「その手には乗らねえ！」

「二つ食べていいよ」

「その手にも乗らねえ！」

「紅茶のお砂糖、二つで良かった？」

「三つっていつも言ってるだろ！」

即答したアスの後ろでフェンが笑いを堪えていた。どんな時もアスは可愛いペット扱いしかされれないのだ。

「もういい！」

「ゴメンゴメン。ほら、キスしてあげるから」

笑うメフィストの合図でメイド達が桜色の菓子と紅茶を準備し始めた。

ここは天界と魔界の狭間にあるメフィストフェレスの館。泡沫の平穏がそこにはあった。

—完—

(J.GARDEN 38 オマケ)

### [3] 悪魔だけどハッピーハロウィン

---

気持ちの良い風が薔薇の香りを運んでくる夜――。

アスベエルとフェンリエルは満面の笑みで着替えていた。

「アス、牙付けたの？」

「そりゃ、そうじゃないと雰囲気だねえじゃん」

「ヴァンパイアと魔法使いだね」

今日はヒトの世界で「ハロウィン」という祭りが行われる日だ、とメフィストが朝食の時に話していた。

二人は一日掛けて館中を回り、沢山の衣装が収められた部屋を見つけた。

そこにはデザインは勿論、サイズも様々な衣装があって、たっぷり時間を掛けて二人は衣装を選んだ。

アスベエルは黒地に金や銀の装飾が施されたヴァンパイアの衣装、フェンリエルは黒地にスカイブルーの刺繍糸で不思議な紋様が描かれた魔女の衣装を身に着けた。

「よし！ 夕食に行こうぜ！ メフィストに悪戯するんだ！」

「うん！ 吃驚させちゃおう！」

子供のように目を輝かせ、二人は衣装部屋を出た。

トリック オア トリート

それを合言葉にお菓子を貰って回るなんて、ヒトは面白い事を考えるものだ。

亡くなった者達の霊を慰める祭りらしいが、子供が喜ぶだけの行事にも思える。

悪魔である二人は面白半分で仮装し、夕食をとる為にメフィストの元へ急いだ。

しかし――。

「ねえ、アス？ 何か変じゃない？」

疑問を先に口にしたのはフェンリエルだった。

「やっぱ、そう思うか？」

薄々、異変を感じていたアスベエルはフェンリエルの手を取った。二人は手を固く握り合い、歩調を落として歩き始めた。

「この廊下……ゆるい下りになってるよね？」

「ああ。俺達、下ってる。それも大きな円を描きながら、ゆるゆる下ってる」

「……誰かに見られているような気がするけど、僕の気のせい？」

フェンリエルの声が震えていた。

この館は常に変化している。

住人が歩いている最中にも変わるので、なかなか目的地に辿り付けない事は日常茶飯事だ。

今も二人は初めての場所に迷い込んでいて、更に、どこへ向かっているのかさえ解らない状態だった。

「アス！」

二人が歩く廊下の明りが消えた。

歩みを止めた二人の前に、ポッポッポ、と蝋燭の明りが現れた。それは長く続いていて、登り降りを繰り返す階段になっていた。

「ヒヒヒヒヒヒヒヒ」

ユラユラと揺れ動く蝋燭の明りに照らし出された不気味な空間に黒い影が舞った。

「……死神（DEATH）！」

アスベエルは一步前になるとフェンリエルを背に庇った。

いつの間にか、死神が支配する死出の塔に迷い込んでしまったらしい。

「よりによって死神かよ！ .....館に住むタチの悪い下等悪魔の仮装じゃねえだろうな！」

強がるアスベエルの頭の上を何かが通り過ぎた。

ゾゾゾッとアスベエルの背筋に寒気が走った。全身の毛が逆立つような恐怖に襲われる。

「アス.....僕、怖い！」

フェンリエルの声が震えていた。怖いのはアスベエルも同じだ。だが、恐怖に負けたら終わりだ。死神は持っている大鎌で魂を狩り取っていく。

「大丈夫だ！ フェン！ 俺から離れるな！」

「う、うん」

「ヒヒヒ.....、イヒヒヒヒヒッ！」

笑い声は遠く、近く、様々な角度から聞こえてくる。

幾重にもこだましていて、死神が一体なのか、複数居るのかすら解らない。

どうやって状況を打開すべきか、アスベエルは必死に考えながら目を凝らしていた。

「うわっ！ アス！」

フェンリエルの悲鳴が聞こえた。

「フェン！」

アスベエルの背後に居たはずのフェンリエルが宙を舞った。

暗闇の中で純白の羽根が乱れ散るのが見えた。

「ア、アァァ！」

「フェーンッ！」

大鎌が何度も空を切る音が響いた。

姿は見えないが、舞い散る純白の羽根とフェンリエルの悲鳴がただ事でない、とアスベエルに知らしめる。

「止めろ！ 止めろー！」

「フハハハハハハハハ」

勝ち誇った死神の哄笑がアスベエルの鼓膜を揺るがす。

居てもたってもいられず、アスベエルは暗闇に向けて駆け出した。

「！」

突然、アスベエルの足元がガラガラと音を立てて崩れた。

アスベエルは奈落の底へ真っ逆さまに落ちていく。

「ちくしょー！」

叫ぶ事しかできないアスベエルの首元にひんやりとした物が触れた。ギョッとして顔を上げると目の前に骸骨の顔があった。死神だ。

「チェックメイト」

骸骨の口、薄汚れた白い歯がカタカタと鳴ってそんな有り難く無い言葉を吐いた。

「メ、メフィストー！」

恐怖に引き攣った表情でアスベエルは叫んだ。

大鎌が振りかざされる。

風を切る音がし、刃がアスベエルを襲った。

「メフィスト！」

「なんだい？」

間延びした返事が聞こえ、アスベエルはガバリと体を起こした。

そこは見慣れたメフィストフェレスの部屋だった。

アスベエルはフェンリエルと並んでベッドに横たわっていて、離れた位置にあるテーブルにメフィストが居た。双子のインプ、キュリーとアリーがエプロン姿でディナーの準備をしている。

「ゆ、夢……？」

アスベエルはベッドに座り込んで呟いた。全身、汗びっしょりだ。

隣で気を失っているフェンリエルを見た。

怪我をしている様子は無い。勿論、アスベエルの首も繋がっているし傷ひとつない。

「トリック オア トリート」

「は？」

「だから、トリック オア トリートだよ。アスもフェンもお菓子を持っていないだろう？ だから悪戯したのさ」

前菜のサラダを口にしながらメフィストが笑った。

よく見ればメフィストが珍しく黒づくめだ。そしてその黒服には骸骨の全身が描かれている。メフィストの足元には大鎌が転がっていた。

「い、悪戯?!」

「やられる前にやらないと面白くないだろう？」

耳に付けたカボチャ型ピアスを揺らしながらメフィストが笑った。

アスベエルはギリッと奥歯を噛みしめた。回避の仕様が無い悪戯だ。しかも自分達の行動をずっと覗き見していて仕掛けてくる、というやり方が気に入らない。

「さあ、夕食にしよう。今夜はキュリーとアリーが腕によりをかけて料理を作ってくれたよ。雰囲気を出す為に蝋燭の明りで部屋を照らそう」

大人げない悪戯を仕掛けたメフィストは涼しい顔で言った。

懨然とした表情でベッドに座っていたアスベエルだが、空腹には勝てない。

グウ、と鳴った腹を押さえ、フェンリエルを起こしてベッドを降りた。

「趣味悪！」

「誰の事だい？」

「メフィストも、この館も！」

「ゴメン、ゴメン。そんなに怒らなくてもいいじゃないか。お詫びに今夜、二人に気持ちのいいイタズラをしてあげるから」

妖しく笑ったメフィストの言葉に、アスベエルとフェンリエルは頬を紅に染めた。

「可愛いね、二人共」

館の主メフィストフェレスは嫣然と笑いながら言うと、可愛い同居人をテーブルに招き、それぞれの頬に口付けした。

「さあ、ハッピーハロウィーン。楽しい夜になりそうだね」

メフィストが笑った。

キュリーとアリーが笑いながら「はい」と返事をする。彼女達は袋に入ったお菓子を持っていた。メフィストが渡したらしい。

それに気付いたアスベエルとフェンリエルが抗議の声を上げたが、メフィストは知らないよ、とすっとぼけるだけだった。

悪魔メフィストフェレスが支配する薔薇の館――。

今宵の館はいつもより少し賑やかな夜を迎えようとしていた。

—完—

#### [4] 悪魔だけどもリークリスマス

---

「何やってんだ？」

小腹を満たそうとキッチンを訪れたアスベエルは目を丸くした。

双子の悪魔、キュリーとアリーが赤い服を着て部屋を飾り付けしていたのだ。

「何ってクリスマスの準備ですわ」

ミニスカートサンタクロース姿のキュリーは満面の笑みで答えた。同じ格好のアリーも笑顔で頷いている。

その言葉通りキッチンと隣接するダイニングには天井まで届くクリスマスツリーが置かれていて沢山のオーナメントが輝いていた。

ツリーの下には中身が入っているのか空なのか解らないが、大小様々なプレゼントボックスが置かれている。

テーブルも椅子も赤と金をベースにしたアイテムでクリスマス仕様に飾り付けられていた。

「あのさ、俺達、悪魔だよな？」

目を瞬きながらアスベエルは二人に尋ねた。

「ええ。アスベエル様は勿論、私達もご主人様も悪魔ですわ」

「クリスマスが何の日なのか知ってんのか？」

「当然、知ってますわ」

「.....解っていてやってんのかよ」

呆れた様に呟いたアスベエルの背後から笑い声がした。フェンリエルの声だった。

「フェン！ お、お前.....なんだよ、その恰好！ うわ！ メフィストまで！」

振り返ったアスベエルの後ろに、トナカイの着ぐるみを着たフェンリエルとサンタクロースの恰好をしたメフィストが立っていた。

メフィストはご丁寧に白い顎髭まで付けている。

「アスベエルは細かい事が気になるんだね」

サンタクロースの恰好をしたメフィストが笑いながら言った。彼はテーブルに着くとアリーにお茶を頼んだ。アリーは二つ返事でお茶の準備に掛かる。

「だ、だってキリストの誕生を祝う日だぜ？ キリストって.....」

「確かにそうかもしれないけれど、余り深く考えなくていいんじゃない？ 人間達の中には信仰とは関係無く、ご馳走とプレゼントを楽しむ者達も居るそうだよ」

笑うメフィストに対し、返事に窮したアスベエルは視線をフェンリエルに移した。長い角まで付けたフェンリエルは恥ずかしそうな笑みを浮かべていた。

「フェンまで何やってんだよ」

「アハ.....。メフィストに言われたんだ。サンタクロースにはトナカイが必要だって.....」

「だからって.....」

文句を続けようとしたアスベエルはフェンリエルが差し出した物を見て言葉を止めた。

フェンリエルの手の中にあったのは赤いリボンだった。

「？」

「あのね、アス。メフィストに言われたんだけど.....」

フェンリエルが申し訳なさそうに言った。チラリと視線をメフィストに向けている。

アスベエルはリボンを手に取り、メフィストを見た。ティーカップを口に運んでいたメフィストがフッと笑った。

「私がサンタクロース」

「ああ」

「フェンリエルがトナカイ」

「ああ」

「後は何が足りないと思う？」

「は？」

アスベエルが首を傾げているとキュリーとアリーが声を合わせて答えた。

「プレゼントが足りませんわ！」

「そう、プレゼントだね」

よくできました、とでも言うようにメフィストが頷いた。

「プレゼント？」

いまいち事情が飲み込めないアスベエルにフェンリエルが囁いた。

「あのね、アスがプレゼント役なんだ。リボンを付けて、サンタクロースが持つプレゼントになるの」

「何だって！」

ようやくメフィストの意図を理解したアスベエルは「ふざけんな！」と叫びながらメフィストを見た。

「リボンを付けてこっちにおいで。プレゼントを持たないサンタクロースって悲しすぎるだろう？」

「だからって俺がプレゼント役かよ！」

「フェンリエルがトナカイ役を選んだからね」

メフィストのその言葉にアスベエルはフェンリエルを見た。フェンリエルは「ごめんね」と申し訳なさそうに笑った。

だが、もしアスベエルもトナカイとプレゼントとどちらの役を選ぶか、と問われればトナカイを選んだらう。フェンリエルに文句を言える立場ではない。

リボンを指先で摘み、アスベエルはメフィストの傍へ向かった。

フェンリエルもテーブルに着いてアリーが準備したマフィンに手を伸ばした。

可愛い自分のペット達が傍に来たのを確認してからメフィストが言った。

「服を脱いでリボンを身体に巻いてくれないかい？」

「ぬ、脱ぐ?!」

「そう。服を脱いで赤いリボンを身体に巻くんだよ。プレゼントは赤いリボンで飾るものだろう？」

フフッとメフィストが笑った。

アスベエルは頬を染めて反論を続けようとしたが、メフィストの指に唇を押さえられた。

「私をご馳走とプレゼントをじっくり楽しむ夜にしたいんだよ？ アスはどうだい？」

「そ、そりゃ……楽しいのは悪くないけど」

「じゃあ、いいね？」

「わ、悪くないけど、でも！」

「嫌なのかい？」

悪魔の微笑みの前でアスベエルは唇を尖らせた。だがその表情は何かを期待していた。メフィストはそれを解った上で今夜の宴をキュリーとアリーに準備させたに違いない。アスベエルは服のボタンを外し始めた。

満足そうに頷いたメフィストがアスベエルとフェンリエルに言葉を投げかける。

「キュリーとアリーがご馳走を準備するまで、お茶とマフィンを楽しみながら少し遊んでいようか」

館の主メフィストフェレスの言葉に逆らう者など館には居ない。

煌びやかな部屋で悪魔達の妖しい宴が始まろうとしていた。

—完—

## [5] 悪魔だけど死ぬ気でリベンジ！

---

「今年こそ、絶対リベンジ！ 死ぬ気でリベンジだ！」

朝食後、自分の部屋で鼻息荒く言ったのはアスベエルだった。

「何の話？」

ソファに座り、本を読んでいたフェンリエルは顔を上げて小首を傾げた。

ペリドットの瞳が不思議そうな表情の中で愛らしく揺れている。

「何って忘れたのかよ！ ハロウィンだよ！ 前はメフィストに酷い目に遭わされただろ！」

「え？ あ、ああ……。リベンジってそのこと？」

「当たり前だ！ 今回は絶対負けない恰好で襲ってやる！」

「お、襲う？」

「勿論！ 先制攻撃！ 奇襲だ！」

自信満々、やる気満々なのは良いが、全速力で壁にぶつかりに行こうとする様子でフェンリエルが目を見つめた。

「……ここが『薔薇の館』で主が『メフィスト』だって知ってるよね？」

「それがどうした？」

「僕らが『愛玩動物扱いされてる』って解ってるよね？」

「滅茶苦茶不本意だけど自覚はしているつもり……」

「それでもやるの？」

「おう！ 窮鼠鬼を噛む、だ！」

「……」

半笑いの顔でフェンリエルは小さく頷いた。

猫が跳ねる勢いでアスベエルがソファから飛び降りた。

ソファの傍にある丸いデスクの上に本を積み重ねたフェンリエルがその後続く。

部屋を出た二人は薔薇の香りに包まれる廊下を進み、階段を登って館の奥へ進んだ。

館の主であるメフィストフェレスを飽きさせないよう意志を持って不規則に変貌する館は容易く牙を剥く。

主には従順で、主が可愛がっている愛玩動物にも寛容ではあるが、アスベエルとフェンリエルの二人はしばしば館の悪戯に惑わされている。

大抵、二人が考えを持って行動すると館の悪戯という邪魔が入る。

だが、今日は館はとても静かで、変貌する事も無くアスベエルが目的とする部屋が容易に見付かった。

「あった！ ここだ、ここ！」

前回と異なる様相の部屋だったが、衣装がズラリと並べられた鏡の壁の部屋にアスベエルが入った。

「……簡単に見付き過ぎだと思わない？」

「そうか？」

「うん。なんだか、わざとこの部屋を僕達が見付けられるようにされていたような感じがして……」

「考え過ぎじゃねえ？」

軽い返事をしたアスベエルは既に部屋の中へ駆け込んでいて、衣装選びを始めていた。

「……いつも遊ばれてるって事を、そろそろ自覚してもいいと思うんだけど」

どう行動しても「メフィストに遊ばれている事実」は変わらない。

そう思えてならないフェンリエルはフツと溜息を吐いた後、無垢な表情で衣装を引っ掻き回しているアスベエルの後に続いた。

「見るよ、これ！ 刀だ、刀！」

「あ、それ、鎧とセットだよ。確か人間界の……小さな島だったかな？ その古い騎士達が着ていた鎧兜」

「すげえ！ 金色の角が二本生えた真っ赤な兜だ！ かけえ〜！」

アスベエルは金瞳を輝かせて兜を頭に乘せた。セットらしい刀を手に取り、鏡になっている壁に向かってポーズを取ると得意顔で頷いた。

「俺、コレにする！ フェンはどうすんだ？」

「えっと……僕は……」

フェンリエルが迷っていると天井からスルスルスル、と何かが降りて来た。

「お二方、私がお手伝い致しましょう」

「え？」

自分達だけしか居ないと思っていた二人は驚いて声がした方を見上げた。

そこには蝶の羽根を背に負った、目を閉じたままの女が天井から逆さ吊りになっていた。紫色のドレスが色白の肌を妖しく飾っているのが印象的だ。

「誰？」

フェンリエルが恐る恐る尋ねると、女は目を閉じたままの顔をフェンリエルの方へ向けて答えた。

「この部屋で衣装を管理している者でございます。アスベエル様はそちらの甲冑がお気に召したご様子。フェンリエル様はこちらの赤い服は如何でしょうか？」

丁寧な話口調の女はスルスルと床まで降りて来た。良く見ると足の先から銀色の糸が出ている。蜘蛛の様に天井から糸で降りてきたようだ。

「え？ あ！」

フェンリエルの服がフワリと風に待って飛んでいった。どこから風が起こったのか解らないが、全裸のフェンリエルが恥じ入る間も無く、赤い衣装に着替えさせられた。

「衣装に似合う化粧もしましょう」

女は弾んだ声でそう言うと、どこからともなく出て来た化粧道具を使い、フェンリエルの顔に化粧を施し始めた。

「く、くくく蜘蛛だ！」

女の背から毛に覆われた八本の腕が伸びているのに気付いたアスベエルは二、三步下がって刀を握り締めた。

「大丈夫ですよ、アスベエル様。私は着替えのお手伝いをするだけです」

そう言った女の腕が二本伸びて、アスベエルの服を脱がし始めた。

「わ！ ちょ、ちょっと待って！」

「甲冑をお一人で着るのは難しいですよ。さあ、甲冑の下に着る服をどうぞ」

アスベエルが受け取ったのは純白の服だった。羊の毛か何かで覆われた、毛布のような生地だ。

「すげえ、柔らかい！」

「気持ちが良いでしょう？ まず、それを着てから甲冑です」

促されるがまま、それを身に付けたアスベエルが壁の鏡を見遣ると、何故か女がアスベエルの首にネックレスを撒いた。黒い革で出来た細いベルトに、大きな金の鈴が付いている。

「……なあ、コレ、違うんじゃないか？」

「いいえ。違ってなどいませんよ」

女がクスクスと笑った。そして何故かスルスルと天井に戻って行った。天井に辿り着いた彼女が両手足を広げるとパッと散って七匹の蝶に変わった。

「あ……！」

フェンリエルが小さな声を上げた。女の正体が解ったのだ。

「何だよ、アレ。それと、何だよ、コレ！」

頭を装着し忘れた着ぐるみのような恰好に、兜を被って首に鈴を付けているという何とも不思議な格好のアスベエルを見たフェンリエルは苦笑した。

「やっぱり……」

「何が『やっぱり』だよ？」

眉間にシワを寄せて首を傾げるアスベエルに応えたのは別の声だった。

「良く似合ってるね、アスベエル」

ザンッと風が起こって衣装が天井に舞い上がった。

そこに現れたのは漆黒の衣装を身にまとったメフィストフェレスだった。ご丁寧に口元には牙が付いている。

「トリックオアトリート」

笑ったメフィストに暫く目を奪われていたアスベエルだったが、何かに気付いたのか悔しそうな表情を作った。

「こ、この部屋……メフィストが俺達を誘い込んだのか！ あの蜘蛛みたいな蝶女はメフィストの使い魔！ 俺が甲冑とか刀とかに手を延ばすって解ってて……」

「かわいいね、アスベエル。人間界には面白い『ゆるきゃら』というものがいるらしくてね？ ある地方のゆるきゃらに、兜を被った真っ白い猫の姿をしているものが居て……ああ、名前、何だったかな？ ……ひこなんとかだったかな？」

漆黒の衣装を優雅に揺らしながら近付いて来るメフィストに向かってフェンリエルは困った様な顔を向けた。

「あの、この衣装は何でしょう？」

「ああ、それは『かむろ』といえはいいかな？ 少々可哀相な物語を背負った少女達の恰好だよ。肩くらいで切り揃えた黒髪に、真っ赤な服を着せられ、狭い鳥籠の様な所で生活を強いられる少女達の恰好なんだ。ある一定の年に達したら男達の相手をするよう教育され、男のモノになる以外に籠から出る方法は無いという可哀相な子達が居たそうなんだ」

そんな悲劇を背負った少女が悪魔の姿になるとどうなるのか、フェンリエルは想像しかけて途中で止めた。

「さて、折角、鏡と色んな衣装がある部屋に居るんだ。色々遊ぼうか」

「あ、遊ぶ？」

「だって、君達はお菓子を持っていないだろう？ だったらイタズラさせて貰うよ？」

クスクスと笑う悪魔メフィストフェレスの前で二人は再びの負けを思い知らされた。

「ちくしょう！ 覚えてろ！」

そう叫んだアスベエルの口から甘い声上がるまで時間は掛からなかった。

悪魔メフィストフェレスが支配する薔薇の館――。

今日の館はいつもより濃密な淫靡さに包まれていた。



## 編集後記

(Neiko)

こんにちは、Neikoです。失敗談は数多くありますが、遂にJ. GARDEN 39の参加申し込みを忘れるという大ボケをやらかしてしまいました。

申し込みは8月までなので、まだ大丈夫と思い、先延ばししていたのがアダとなりました……。サークルカットを作るのがちょっと（^^;）。文字書きにとっては、大きな課題なんですよね、あれ。

いつもZEMさんのイラストを加工させて貰っていて、今回もそのつもりでした。が……あれやこれや、優先すべきこ

とがあって新年度になってから時間がアツと言う間に過ぎてしまいました。

ついでに言えば、新刊の準備も全然できていないんです。あははは……。

代わり、と言っては何ですが、サイトの改装を頑張っています。電子書籍という形で新しい作品をUPできればいいなと思っています。

不甲斐なさ満載ですが、これからもどうぞよろしくお願いします。サイトや作品の公開方法等についてご意見などがありましたらお知らせくださいね。

## \*\* 奥付 \*\*

【となりくみ事務局】

<http://www3.to/tonarikumi>

[tonarikumi@gmail.com](mailto:tonarikumi@gmail.com)

イラスト：ZEM

文：Neiko

【電子版公開サイト】ブクロブのパー

<http://p.booklog.jp/>



## AZ stocks Plus.2 【無料】 電子マガジン

<http://p.booklog.jp/book/100419>

著者 : AZ stocks

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/azstocks/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/100419>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/100419>

電子書籍プラットフォーム : ブクログのパー ( <http://p.booklog.jp/> )

運営会社 : 株式会社ブクログ